

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

ドイツ体操祭（Deutsches Turnfest）に関する近年の研究動向

著者	松尾 順一
著者別名	MATSUO Junichi
雑誌名	ライフデザイン学研究
号	11
ページ	267-275
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008422/

ドイツ体操祭 (Deutsches Turnfest) に関する 近年の研究動向

Recent historical studies on German Gymnastics Festivals

松 尾 順 一
MATSUO Junichi

ドイツ体操祭は、1860年に祖国の統一を希求する国民運動の高揚とともに、第1回大会がエルンスト I 世の庇護のもとコーブルクで開催された。それ以後も、ドイツ体操祭は、ドイツ帝国、ヴァイマル共和国、ナチの国家社会主義、そして戦後の東西ドイツの時代を経て今日まで継続して開催されており、2013年のマンハイムでのドイツ体操祭をもって、42回目を数えるドイツでは最も歴史と伝統を誇る祭典である。

そこで本考察では、ドイツ体操祭に着目し、ドイツ体操祭に関する近年の研究動向を明らかにすることにする。取り上げた研究論文は、M.クリューガーの「ドイツにおける文化的国民形成のための帝国創建期10年のドイツ体操祭の意義」(Die Bedeutung der Deutschen Turnfeste des Reichsgründungsjahrzehnts für die kulturelle Nationsbildung in Deutschland. in: Sozial-und Zeitgeschichte des Sport, Heft1, 1995, S.7-21.) と、H.ウーバーホルストの「時代が変化する中でのドイツ体操祭：一つの比較考察」(Deutsche Turnfeste im Wandeln der Zeit: eine vergleichende Betrachtung. in: Stadion, 1986/87, S.121-129.) と、G.フィスターの「ドイツ体操祭での女性：体操促進運動の中での性別秩序の変遷のために」(Frauen bei deutschen Turnfesten. Zum Wandeln der Geschlechterordnung in der Turnbewegung. in: Sportwissenschaft, 2000/2, 30. Jahrgang, 2000, S.156-179.) と、L.パイファーの「ドイツ体操祭－政治的、社会的展開の動向の中で？」(Deutsche Turnfeste - im Trend politischer und gesellschaftlicher Entwicklung ?, in : Moden und Trends im Sport und in der Sportgeschichtsschreibung, 2003, Hamburg, S.127-142) の4編である。

以下で、それぞれの論説の要旨を紹介することにする。

M.クリューガーの「ドイツにおける文化的国民形成のための帝国創建期10年のドイツ体操祭の意義」について

本論説の目的は、タイトルにもあるように、1860年以後のドイツ帝国創設期に開催された3つのドイツ体操祭が、文化的国民形成に果たした意義を明らかにすることである。まず、クリューガーは、この論説を始めるにあたり、D.ランゲヴィッシュの見解を引用し、ドイツにおける国民形成の3つの局面を提示している。

まず最初は、交通やコミュニケーションの手段の発達にともなう全国的な経済圏の成立の局面であり、次は、国民がすべての政治的な陣営の中でその真価が認められた政治的局面である。そして最後

は、日常生活や、学校や、企業や、工場や、芸術や、音楽や、書物や、旅行や、クラブにおいて推し進められた生活世界や生活体験の国民化という社会－文化的局面であるとしている。この生活世界や生活体験の国民化は、脱地方化 (Entlokalisierung) と結びついており、それゆえ、体操 (Turnen) の国家的な展開も、体操家たちの全国組織であるドイツ体操連盟 (Deutsche Turnerschaft) やドイツ体操祭を通し推進された、と述べられている。

次にM.クリューガーは、コーブルク (1860)、ベルリン (1861)、ライプツィヒ (1863) において開催されたこの3つのドイツ体操祭の機能に言及している。つまり、これらの体操祭は、一つの“メッセ”であり、そこでは各種の体操運動が紹介され、交換されそして全国に移送され、姿勢や運動の一つの国家的な基準が示され、さらには政治的、社会的、文化的なテーマについての活発な意見交換も行われたとしている。つまり、これらの体操祭は統一化するように、またアイデンティティを創造するように作用したと述べられている。

コーブルクにおける第1回ドイツ青年－体操祭について詳論した章においては、祖国の統一を求める国民運動を背景に実現した第1回ドイツ青年－体操祭開催に至る経緯や、その実現に大きな影響力を及ぼしたK.カレンベルクとT.ゲオルギーの「集合への叫び」や、この「集合への叫び」とともに、「ドイツ体操新聞」の同号に掲載されたベルリン体操委員会の「祖国の体操術と防衛体制」というプロイセン連邦議会への建白書に関しても言及されている。また、体操祭の中に組み込まれ開催された体操会議において、体操に関わる統一的な「手引書」の作成や、ドイツの体操クラブの屋根団体であるドイツ体操同盟設立の問題が審議されたことも言及されている。さらに、第1回ドイツ青年－体操祭に関する警察の報告や、シュトゥットガルト体操クラブのA.ドゥルクの報告や、K.カレンベルクのシュレースヴィヒ・ホルシュタインの運命を論じた感動的な講演についても取り上げられている。

ベルリンで開催された第2回ドイツ体操祭について論及した章においては、体操会議のうちに合意された「体操は政治から離れ、一つの陶冶手段であるべきである」という考えが、1861年のゴータでの拡大委員会会議にも引き継がれ、その考えがその後の体操家たちの「指導原理」になったことが明らかにされている。

ライプツィヒで開催された第3回ドイツ体操祭を論じた章においては、まず、1862年のベルリンでの体操祭から1863年のライプツィヒでの体操祭にかけての1年間で、体操クラブ (Turnverein) 数が1,284から1,701クラブに、会員数が134,000名から170,000名に大幅に増加したことが示されている。20,000人の体操家が参集した第3回ドイツ体操祭は、祖国の統一を希求する国家的デモンストレーションであり、また大規模なドイツの親睦祭の舞台であったとし、そこでは、各種の体操運動や会議よりも、祭典旗、祭典行進、講演、詩の朗読、大衆集会、そして万歳三唱が大きな意味をもった、と述べられている。ライプツィヒ体操祭の政治的・歴史的意味は、H.トライチュケの歴史的な祭典講演や、以前は反動的な政策をとっていたザクセン首相のボイストが登場し祭典を賛美する演説を行ったことにある、としている。

最後に、コーブルクとベルリンとライプツィヒにおける体操祭が、“文化的な国民形成”に果たした意義について、以下のように纏められている。

これらの体操祭は、運動の祭典だけではなくて、むしろ体操祭の時に行われた会議を通して、ドイツにおける身体文化の定型化と国民化のための本質的な準備を行い、その中で、ドイツにおける体操

的な身体文化が、理論と実践の両面で発展できる枠組みが以下のように置かれた、としている。

第一は、体操クラブの中で営まれる身体運動の機能的で民主的な国家レベルでの組織が構築された。

第二は、国家や社会に対しての“身体文化的な関心”が主張され、その主張には定期的で体系的な体操運動が徐々にドイツの学校や軍隊の中に導入されるという成果をとまなっている。

第三は、体操運動の一つの国家的基準が発達しそして拡大した。

第四は、体操の目標や内容や形式や方法やそして政治や社会における体操の位置づけに関する集中的な審議が始まった。

第五は、その審議は、特殊な体操上の儀式や交流方法と結びついた。

第六は、上記すべてのものは、ともに、一つの強い“我々”としての感情を体験しそして固めることに貢献し、その感情は、体操祭参加者にのみ及ぶのではなく、ドイツ人の愛国的な“我々”としての感情の一部を形成した。

最後に、M.クリューガーは、エリアスの見解に依拠し、体操家の思考や感覚や行為は、“ドイツ人のハビトゥス”の中に浸透した、と述べている。

G.フィスターの「ドイツ体操祭での女性 体操促進運動における性別秩序の変遷のために」について

本論説は、ジェンダー研究の視点から、今日に至るまでのドイツ体操祭において、女性の体操家がどのような状況に置かれ、女性の体操にはどのような位置づけがなされていたのかを歴史的に論究したものである。

ドイツ帝国時代において女性の体操家がドイツ体操祭に始めて参加したのは1894年のブレスラウでの第8回ドイツ体操祭であり、その体操祭では、当地の50名の女性の体操家が、垂鈴体操や徒手体操や隊列運動や輪舞や器械での諸運動の演技を披露したとしている。つづく1898年のハンブルクや、1903年のニュルンベルクや、1908年のフランクフルトにおけるドイツ体操祭においても、女性の体操家による体操やダンスなどの上演が行われたが、しかしそれに参加できたのは開催都市に居住する女性の体操家に限られていた、と述べられている。また、女性の体操家は、男性とともに祭典行進や各種の競技種目に参加することができず、女性の体操家の参加は、体操演技などの上演のみに限定されていたとしている。G.フィスターは、このような状況を生むに至った原因は、ドイツ体操連盟首脳部の女性に対する保守的な態度にあるとし、1903年の連盟首脳部会議では、「女性は体操連盟の会員ではなくそのため体操祭に参加することはできない」という取り決めや、1906年の同様な会議で、「開催都市の女性のみが体操祭には参加すべきである」という合意がなされたことを明らかにしている。女性の体操家の参加が、開催都市の女性に限られたことは、他の都市の体操祭への旅行により両親や夫の下から離れ危険にさらされるという危惧の意識や、祭典行進に女性の参加が認められなかったのは、女性が公衆の目に“さらされる”という意識からであろうと、G.フィスターは論じている。さらにG.フィスターは、体操祭に出場する女性の体操家は、その服装も制限されていたことを取り上げている。つまりスカートかズボンかの問題であり、スカートは“つつましい女らしさのシンボル”であ

り、ズボンは“解放のシンボル”であったという。

1906年ドイツ体操連盟の幹部が、「女性は体操祭へはスカートを着用し参加すべきである」と決定したことや、1908年のフランクフルトにおけるドイツ体操祭では、紺の折り目のついたスカートと黒のストッキングと黒の体操靴を身につけ、スカートの下にはズボンをはいて参加したことが、明らかにされている。1913年のライプツィヒのドイツ体操祭になってようやく女性の体操家は、幅広のニッカーボッカーを着用し体操を敢行したとしている。

さらには、第一次世界大戦の前まで、“女性らしい運動”とは、という議論が激しく展開された、とフィスターは指摘している。ドイツ体操連盟の幹部は、優雅さや気品を重視し、徒手体操や輪舞や能力や技術をあまり必要としない単純な器械運動を奨励したのに対し、各種の器械での“乗馬姿勢の運動”に対しては、“女性らしくない”として多くの批判の目が向けられたとしている。

ドイツ体操祭やドイツ体操連盟において女性の体操家や女性の体操に対するこのような取扱いを生むに至った背景には、クーンから主張された“二重の経済”という考が大きく作用していた、とG.フィスターは主張している。つまり、近代の産業社会は、有給の営利活動と無給の家事の協働によって成り立っており、そのような社会には、女性の無給での家事や子供の教育は不可欠であるとしている。体操家の婦人は家と家族を心配し、男性には職業と世論と政治と祖国防衛を割り当てるという性別イデオロギーは社会全体に拡大していたが、ドイツ体操連盟においては特にそのイデオロギーが強く主張された、とG.フィスターは述べている。

敗戦後のヴァイマル共和国において、女性を取り巻く状況は大きく変化し、女性にも男性と同じような国家市民的権利が認められたとしている。このような状況の変化を背景に、ドイツ体操連盟においては、1926年には女性体操委員会と並んで女性審議会が設置され、1929年には初めて女性の体操指揮官が任命され、同年にはドイツ体操連盟中央委員会の委員として初めてH.ヴァーニングホッフ女史が選出された、と述べられている。

1923年のミュンヘンにおけるドイツ体操祭では、他の都市の女性体操家の参加も認められ、祭典行進や各種の競技にも男性とともに出場が認められたとしている。この体操祭では女性のためのプログラムとして、器械運動と陸上競技種目からなる9種競技や器械運動からなる7種競技や陸上競技種目からなる4種競技などが用意され、これらの競技には2,646名の女性が参加し、集団徒手体操には25,000名の男性の体操家とともに、9,000名の女性が参加した、と述べられている。1928年のケルンにおける第14回ドイツ体操祭でも、女性の体操家のために、陸上競技種目からなる複合競技や器械運動種目からなる6種競技などが用意され、さらにこの祭典では、“リズム体操 (Rhythmische Gymnastik)”の演技が初めて女性の体操家から披露され、また同体操祭で、初めて女性が祭典の講演者として登壇した、とG.フィスターは述べている。

このように、ドイツ帝国の時代と比較し、ドイツ体操祭での女性を取り巻く状況は大きく好転したといえる。しかし、女性が男性と同様に競技に参加し、勝利をめざし過激な運動を行うべきかどうかという議論がドイツ体操連盟の幹部と女性体操家の間で展開されたと、G.フィスターは指摘している。ハノーファーの模範体操学校の校長でありドイツ体操連盟女性委員会の委員であるC.ロゲスは、ギムナスティック的な要素を含んだ“女性らしい”体操システムを発展させ、さらに少女-婦人のための体操の「ガイドライン」を作成し、そのガイドラインでは、女性に適した体操として、簡単な支

持－懸垂運動を奨励した、と述べられている。また、ドイツ体操連盟女性委員会も、器械体操のやりすぎや、中・長距離走には注意を喚起しており、E.ノイエンドルフは、器械での体操競技を女性は断念すべきである、と主張していたとしている。それに対し、ベルリンの医師で女性体操指揮官であったフリトベルクは、G.ロゲスのガイドラインは女性体操の一つの後退であると、またある一人の女医は、医学的観点から、「女性が行えない運動はない」、と主張していたとG.フィスターは述べている。さらに、ケルンでの体操祭のうちに、2人の女医が調査を行い、その結果、体操に起因する健康上の被害は認められず、女性の体操家は一般の女性よりも、むしろ健康であることが証明された、としている。

さらにフィスターは、第二次世界大戦後の体操促進運動やドイツ体操祭における女性について取り上げ、1950年に設立されたドイツ体操家同盟（Deutscher Turnerbund）等の指導部における女性役員の人数や同同盟における女性の会員数の急増を明らかにしている。ドイツ体操家同盟の幹部会に占める女性の人数は、1980年代までは会則により3名であり、現在は2名となっており、1997年時点での同同盟の役員総数332名中その24%が女性であることや、州体操連盟の幹部会の30,000のポジションの35%が女性が占めていることが示されている。ドイツ体操家同盟の会員数は、1950年代の約900,000名から1997年の45,000,000名に急増し、その会員数に占める女性の比率も、1970年の52%、1980年の65%、現在の70%に増加したことが提示されている。

第二次世界大戦後のドイツ体操祭や体操促進運動における特色は、まずスポーツの要素が拡大したこと、つまり1964年からドイツ体操祭の中でスポーツ種目ごとのドイツ選手権大会が举行されたことであり、また、“スポーツギムナスティック”が多くの女性を取り込み体操祭のなかで大きな位置を占めるようになり、さらにこのようなギムナスティックが表現ダンスやエアロビクスやヒップポップやロープスキッピングなどと結びつき、より発展したことであり、G.フィスターは述べている。

G.フィスターは、1994年のハンブルクにおけるドイツ体操祭を例に挙げ、その体操祭の運営組織のほとんどが男性であったのに対し、書面のほとんどを飾っているのは女性であると述べ、最後に、男性はどこにいるのか？と問いかけている。

このように本論説は、ジェンダーの視点から、ドイツ体操祭や体操促進運動における女性の位置づけや女性の体操について歴史的に論究しており、新たなドイツ体操祭研究へのアプローチとして評価できよう。

H. ウェバーホルストの「時代が変化するなかでのドイツ体操祭：一つの比較考察」について

本論説の特色は、ドイツの三月革命期に顕在化した体操家の自由主義的志向と革命的・社会主義的志向が、今日に至るまでのドイツ体操祭や体操促進運動の中にどのような形で現れ、さらには相互に関連し合ったのかを論究したところにある。

H.ウェバーホルストは、まず、1850年代末の祖国の統一を求める国民意識の高揚とともに実現した第1回ドイツ青年－体操祭の開催から、1868年にドイツ体操連盟が設立されるまでの経緯を概観し、その中で、1866年の北ドイツ連邦誕生後、多くの体操家が、オーストリアを含めたドイツの統一を期

待しビスマルクの政策に融和していった、と述べている。1880年のフランクフルトでの第5回ドイツ体操祭では、会長のゲッツが祭典講演の中で、“黒と赤の帝国の敵”を帝国議会から追い払うべきであると主張し、またゲッツは1878年の社会主義者鎮圧法にも賛同したとしている。さらに、H.ウエバーホルストは、どんな場合でもドイツ体操連盟の指導者は、内政的な敵対者との、つまり政治的なカトリック主義や社会民主主義者との闘争においてはビスマルクの側に立ち、続く体操祭（ドレスデン1885、ミュンヘン1889、ブレスラウ1894、ハンブルク1898、ニュルンベルク1903、フランクフルト1907）においては、いつも帝国文化や防衛教育やヴィルヘルムⅡ世の帝国主義的政治を支持していた、と述べている。“黒－白－赤色”のドイツ帝国旗の導入と、“黒－赤－金色”の旗の放棄は、世界強国と艦隊政治を象徴していたとしている。

つづくヴァイマル共和国の時代の体操祭として、ウエバーホルストは、帝国文化の伝統を引き継ぐドイツ体操祭と、社会主義的・共産主義的な信条を掲げる労働者スポーツ連盟より開催された連邦祭を取り上げている。ドイツ体操祭は、1923年にミュンヘンで1928年にはケルンで開催され、両体操祭は、占領された地区における“同胞のための”、そして“ラインラントの解放”のための国家的なデモンストレーションとして機能した、と述べられている。一方で、労働者体操－スポーツ同盟（Arbeiter-Turn-und Sportbund）の連邦祭は、1922年にライプツィヒで1929年にはニュルンベルクで開催され、両連邦祭はインターナショナルな性格を有し、1922年の同祭典には、15か国の労働者が参集し、労働革命歌であるインターナショナルの歌により祭典は始まった、と語られている。ドイツ体操祭とこの連邦祭は、プログラムの大枠は類似していたが、その内容や理念において大きな違いをみせており、連邦祭では、精神的、経済的、社会－政策的に奴隷化した人間を解放するという趣旨をもつ“理念劇”が祭典の中心に据えられたとしている。

ナチの時代に入ると、ドイツ体操連盟は、E.ノイエンドルフの手によりシュトゥットガルトの体操祭をまえにA.ヒトラーに引き渡され、一方で労働者スポーツ促進運動も解体された、と述べられている。スポーツは、ついに1933年に統制され、新しい法律に基づいて専門部局に集中化され、新しい指導者の一つの“道具”となった、とウエバーホルストは主張している。

戦後の西の占領地区で民主的なスポーツ組織が再編成される際、左の労働者体操－スポーツ同盟と右のドイツ体操連盟の再設立は不可能であり、1950年12月10日に創設されたドイツスポーツ同盟（DSB）は、現実的な対応から誕生した一つの“妥協の決着”であった、と彼は述べている。しかし、その当時の労働者スポーツ選手が、労働者体操スポーツ同盟の再建を断念したとしても、彼らは、ドイツ体操家同盟（Deutscher Turnerbund）に加盟する体操－スポーツクラブの基盤の上で、民主化や新しく構造化するために決定的な貢献を果たした、と労働者スポーツ運動の伝統を評価している。ドイツ体操家同盟は、第二次世界大戦後大きく飛躍し、そのドイツ体操祭（フランクフルト1948、ハンブルク1953、ミュンヘン1958、エッセン1963、ベルリン1968、シュトゥットガルト1973、ハノーファー1978、フランクフルト1983）では、社交的で喜びに満ちた多様な身体活動や、“開かれた社会”の本質的なメルクマールである多様なコミュニケーションの形態や、そして競技の中でのすばらしい成績が示されたとしている。そして最後に、H.ウエバーホルストは、スポーツの中での“社会的攻撃”は、古い労働者スポーツ運動の志向に一致すると、この論説を結んでいる。

L.パイファーの「ドイツ体操祭－政治的そして社会的展開の動向の中で」について

本論説は、19世紀から今日に至るまでの政治的、社会的枠組が変化する中で、ドイツ体操祭が“時代を映し出す鏡”としてそれぞれどのような様相を呈したのかを検討した研究である。

まず19世紀のドイツ体操祭は、祖国の統一を希求する“ドイツの国民運動の子ども”であり、体操家たちから展開された体操促進運動は、国家的そして自由主義的－民主主義的思想の普及を旗印にした政治運動であったとしている。このような観点のもとに、ライプツィヒ解放戦争の周年祭として開催された1814年のハーゼンハイデでの体操祭や、ドイツ三月革命前期の体操祭や、50年代末に再び興隆した国民運動とともに実現した第1回ドイツ青年－体操祭や、国民運動の頂点を形成した第3回ドイツ体操祭が取り上げられ、それぞれの体操祭が有する政治的な側面が浮き彫りにされている。1814年の体操祭では、講演や朗読や祭典歌をとおり、封建的な権力国家に対する敵対姿勢が表現され、つまり立憲君主国家や民主的権利や営業の自由や国民軍の編成などが要求されたとしている。三月革命前期の地方体操祭では、解放戦争を回顧するという動機は薄らぎ、祭典日は祝日や日曜日へと、また祭典会場も都市の中へ移動し、祖国統一のシンボルである“黒－赤－金色”の旗の採用をとおり、政治的な敵対精神は受け継がれたが、その後の三月革命の挫折により、この民主的－敵対的な組織の存立基盤が取り除かれた、とL.パイファーは述べている。第1回ドイツ青年－体操祭の中心は、体操的な諸活動ではなく、むしろ、イリヒの言葉を借りるならば、“再び動機づけられたドイツの体操促進運動の統一を見えるように表現すること”がこの祭典の目標であったとしている。ライプツィヒにおいても、器械での実際的な体操や、体操に係る会議も副次的な役割を演じ、国家的で愛国的な儀式やシンボルがその体操祭を特徴づけ、特にH.トライチュケの政治的講演は、かつてのドイツ三月革命への想いを募らせるものであったとしている。

プロイセン－小ドイツ的なドイツ帝国が創建された後は、民主主義的－革命的精神が体操促進運動の中から消え、体操家たちはビスマルクの政治と折り合っていた、と述べられている。この皇帝時代のドイツ体操祭の大きな特色としては、1879年に体操祭実施規程が制定され、ドイツ体操祭以外の地方体操祭でもそれがマニュアルになったことや、陸上競技種目と器械運動種目からなる複合競技が導入されたことや、イギリス産のスポーツが体操祭にも受け入れられたことや、制限があったものの女性の体操家の演技も披露されるようになったことなどが挙げられている。皇帝時代の体操祭では、三月革命期や60年代の体操祭を特徴づけたそして民主的な権利や国家的な統一めぐる闘いの中で体操家に政治－敵対的性格を与えていた国家－革命的精神は、ビスマルクの権力や社会政策のための国家を担う忠誠心に変化した、とL.パイファーは述べている。つまり、“大ドイツ的な体操組織の”黒－赤－金色の旗は、“黒－白－赤色”の旗に置き換えられ、帝国文化や防衛教育やヴィルヘルムⅡ世への支援やそして“黒と赤の帝国の敵”に対する攻撃が、皇帝時代の体操祭では、ますます強くドイツ体操連盟の政策の前面に登場したとしている。

第一次世界大戦後のドイツ体操祭として、まず1922年ミュンヘンで開催された体操祭が取り上げられ、とくにその体操祭での祭典行進は、占領地域におけるドイツの住民たちのための政治的デモンストレーションであり、その占領地区の体操家の体操祭への参加が連合国ラインラント委員会から禁止

されていたものの、その地区の多くの体操家が夜ライン川を泳いで渡り、ミュンヘンへと旅立った、と語られている。続く1928年のケルンでのドイツ体操祭の折に、スポーツと体操（Turnen）との対立が鮮明化し、その結果、スポーツの各団体は、ドイツ体操祭とは別にそれぞれ選手権大会を開催することになったとしている。また、ドイツ体操連盟のオリンピック参加問題についても言及されている。ドイツ体操連盟は、アテネでの第1回近代オリンピック大会から1904年の第3回大会まで参加を強く拒否し、同連盟のドイツ帝国体育委員会への加入をきっかけに、1908年のロンドンでの第5回大会には参加したが、その際にドイツ体操連盟内で参加の是非をめぐる激しい議論を引き起こし、続く1912年のストックホルムでの大会には、ドイツ体操連盟の会員は、同大会の体操競技には参加しなかった、とL.パイファーは述べている。

「鉤十字」の旗印の下で開催されたドイツ体操祭として、1933年にシュトゥットガルトで開催された体操祭が取り上げられている。E.ノイエンドルフは、ヒトラーに“一人のユダヤ人もいないドイツ体操祭”を捧げるために、シュトゥットガルトの体操祭までにユダヤ人会員を体操クラブから除名したことや、この体操祭ではナチ特攻隊が祭典行進に参加したことや、“第三帝国の旗”が祭典会場に翻っていたことや、特攻隊の“青色の名誉服”が至る所に見られたことなどが、述べている。つまり、体操祭の中での国家社会主義的な乱暴グループとの結びつきにより、ドイツ体操連盟は、国家社会主義的な権力奪回過程において、政治的そして社会的な変化に積極的に関与した、とL.パイファーは結んでいる。

1950年に創設されたドイツ体操家同盟は、競技スポーツにおける最高達成の追及と大衆スポーツの促進という2つの課題を担っており、ドイツ体操祭においても、オリンピックの体操競技のような競技形態と伝統的な多種目競技や各種の上演などがプログラムを構成していたとしている。1953年のハンブルクにおけるドイツ体操祭では、ドイツ体操家同盟は、青少年のためのプログラムとして、ある種目に特化した時に生じる弊害を避けるために、陸上競技種目と体操や水泳を組み合わせるグループでの複合競技を導入し、それ以来この複合競技もドイツ体操祭のプログラムを構成するようになった、と述べられている。

1962年のドイツ体操家同盟とドイツスポーツ同盟による“第二の道”の公表をきっかけに、多くの住民層を取り込むための大衆スポーツ的競技プログラムの展開がドイツ体操祭でみられるようになり、その意味でエッセンでのドイツ体操祭は、“一つの転換点”であったとしている。さらにドイツ体操祭でも競技スポーツ化がすすみ、1968年のベルリンでの体操祭では、スポーツ種目ごとのドイツ選手権が、5年後のシュトゥットガルトでのドイツ体操祭では学生選手権も実施されるようになったとしている。

L.パイファーは、今日のドイツ体操祭は、体操やスポーツの新しい展開や流行現象の一つの“メッセ”であり、このような体操祭からそれぞれのクラブは、幅広い実践的な活動のための刺激を吸収するようになった、と述べている。また、ドイツ体操祭は、19世紀の“男性の体操家”の祭典から、20世紀においては“女性や青少年の体操家のための祭典”へと変化し、19世紀の初め頃の体操家たちの社会批判的な役割を今日は主に、青年の体操家が受け継いでいる、と語られている。つまり、1990年のドルトムント・ボッフムでの体操祭の際のごみ分別活動によって、彼らは、大規模なイベントの際の経済的な問題にも注意を向けさせ、その行動は、1994年のハンブルクにおける体操祭での使い捨て

食器の導入や、プラスチックコップやアルミニウム梱包の禁止という成果を導いたとしている。

最後に、L.パイファーは、この論説を次のようにまとめている。

ドイツ体操祭は、体操の諸要素が二次的な機能をもった政治的祭典から、競技や娯楽や社交により特徴づけられる一つの祭典に移行した。ドイツ体操祭は、今日的な語法に従うと一つの“イベント”である。政治的な広がりやの消失は、政治的な理念としての体操の伝統を受け継ぐドイツ体操家同盟の不安定さを露呈している。平和保障、環境保護、諸外国の敵との闘いは、今日燃え上がっている社会的、政治的問題であり、ドイツ体操家同盟はそれらの諸問題をしまい込むべきではない。大衆的な催しとしてのドイツ体操祭は、今日の社会的、政治的問題をテーマとして取り上げる適切なフォーラムである。

結びにかえて

M.クリューガーは、ドイツ帝国創建期10年における3つのドイツ体操祭が文化的国民形成に果たした意義を明らかにしており、G.フィスター、H.ウエバーホルスト、そしてL.パイファーは、今日までのドイツ体操祭を対象に、それぞれの研究の視点からドイツ体操祭の中に潜んでいた「新たな」諸相を浮き彫りしている。それを踏まえ、G.フィスター、H.ウエバーホルスト、L.パイファーは、今後のドイツ体操祭が進むべき方向を示唆しているといえよう。G.フィスターは、ドイツ体操祭運営役員への多くの女性の登用を、H.ウエバーホルストは、労働者スポーツ運動の中で培われた伝統的精神の再評価を、また、L.パイファーは、社会的・政治的課題を取り上げるフォーラムとしてのドイツ体操祭を、主張しているようにも思える。三者の研究は、将来を展望する歴史的研究として大いに評価されよう。

しかし、一方で、M.クリューガーのような、ある特定の時期のドイツ体操祭に着目し、深く切り込んでいく実証的研究の必要性も感じざるを得ない。たとえば、ドイツ帝国期におけるドイツ体操祭では、イギリスからのスポーツに影響をうけて体操界の中でどのような議論が展開されたのか、またその影響をうけてドイツ体操祭のなかの競技種目がどのように変化したのか、さらには、ドイツ帝国文化を支えるドイツ体操祭において、どのような集団徒手体操や政治的講演やセレモニーなどが挙行されたのかなど、まだ明らかにすべき事項が多々あることも事実である。これらは、今後の筆者の研究の課題としたい。

（本研究報告は、平成26年度海外特別研究期間中に収集した論説をまとめたものである。）